

近松浄瑠璃の「古今集仮名序」

—『信州川中島合戦』など—

常 吉 由 樹 子

(一) 『心中二枚絵草紙』

時代浄瑠璃と、世話物浄瑠璃について、例えば、段数・巻数の違い（注1）、各段の構成の緊密度の違い、あるいは、身替りという劇的要素が、有効か徒労に終わるか、といった（注2）、さまざまな徴表が指摘され、論じられてきた。

ここで、近松の世話浄瑠璃・時代浄瑠璃双方に、「古今集仮名序」の引用・もじりが、見られることについて考えてみたい。たとえば、近松の通常三作目の世話物浄瑠璃とされる『心中二枚絵草紙』（宝永三（一七〇六）年三月竹本座初演）は次のように語り始める。

すでに、今年の酉もたち、戌の顔見世朝木戸をあけぼの深く、提灯の、影きらくくと初霜の、おきな面のこやかに、始り呼ぶ、声に引かれて、老も、若いも見る人は、余念なじみに御鬘眞に、ようお出やった、朝日影、御代も御国も久方のこの日の本の習しの、歌を種なる謡物、天地を動かし、鬼神を感じしめやかに、妹背も猛き武士も、心やはらか饅頭や、菓子に、火繩に、番付と、売る声にまで節こもる、竹の紋つく道行の、一六本をめせく

目狭笠、笠も、預かる、預けてござれ、紅絹の紵紐、浅黄紐え、はんじやう、はんじやう、イヤこの所繁昌、毛氈しき島の、その難波津の冬籠り、今を、春べの顔見世に、日も長事の、御退屈、はや今日のお暇と、散らし太鼓の下とゞろき、明日は疾うから唐錦、彩る空は夕陽の、山は夕の雲の帯、腰の廻りの御用心、押すまい、押すまい、押すまい日の入来る人や、帰るさや、花山の幕か、袖続く、貴賤群集は冬ながら、心ぞ、三月とへなりにける。中に、家名も、君が名も、世上に高きてんまやの、おしまと言ひてかの里におはつが後嗣隠れなし、この頃明石の貞といふ馴染の客に揚げられ、今日は南へ連れて出る。いづくはあれど、曾根崎の、ゆかりの芝居、はつ様もさだめし仏金色の、身あがりと聞く……

(日本古典文学全集『近松門左衛門集(2)』による)

「歌を種なる」「天地を動かし、鬼神を感じしめ」「妹背も猛き武士も、心やはらか」などは誰の目にも古今集仮名序をふまえており、「難波津の冬籠り、今を、春べの」また「おしまといひて……隠れなし……明石の貞」はそれぞれ「難波津に咲くやこの花冬籠り今は春べと咲くやこの花」「ほのぐと明石の浦の朝霧に島隠れ行く舟をしぞ思ふ」の、やはり仮名序に挙げる歌を織り込んだ表現であることが明白である。ここでの仮名序はこの『二枚絵草紙』においてどのような役割を果たしているのだろうか。

一部の例外はあれ、近松の世話物浄瑠璃には、「大序」がないとされる。ここは、「古今集仮名序」を借りてその代用とするかのように冒頭に持ってきているともいえるのだ。偉大な先行作であり、大評判を呼んだ『曾根崎心中』(元禄十六(一七〇三)年五月竹本座初演)を、究極まで美化して言及することで、作品全体のテーマをたてて見せ、主人公市郎右衛門の弟善次郎の悪巧みの小細工のために、善良な二人がやむなく「心中」をえらぶことになる、その筋立てと、

最期場でも念入りに『曾根崎心中』を重ねようと(注3)する記述がある。そこと呼応して、この「仮名序」利用は、作品全体の求心力を強力にバックアップしていると見えるのである。互いに離ればなれでも、刃と手鏡で合図をかわし、最期も互いを幻に見ながら息絶える、といった、ねちっこいほどに情念に重きを置いた趣向といい、広末保氏がかつて「他愛ない」と評した(注4)善次郎の回心といい、まとまりそうにない幾分安手の筋立てを、あやうくまとめているのが、このもっともよく知られた和歌論の「古典」だった、ということだろう。

この『二枚絵草紙』が作品としてまとまっているか、というような大それた判定についてはちょっと遠慮しておくが、とにかく、形としてみる限りでは、まとまって見えるようにとの意識から、首尾に配置されているように見える。意地悪くいえば、近代の研究者たちが見とがめる前に、近松自身が、ちょっとこの作品はまとまりが「やばい」と気付いていた可能性がある、という話にもなってくるだろう。

(二)『津国女夫池』

前後の呼応が、まとまりがあるらしくみせるちょっとした小手先の技巧である、というのは、あるいは学生への作文指導レベルの話にすぎないかもしれない。ただ、もうひとつ私が注目したいのが、この「古今集仮名序」とそれにつながる和歌的要素に、このねちっこい情念がちの、この作品との親和性があるかないか、である。

「感じ」だけで根拠もなく結論を出すわけにいかないのと、とりあえず、ずっと後の時代物であるが、同様に「古今集仮名序」を正面切って使っているものを一作、使用は「かすか」だが、登場人物の選択におもしろい趣向の見えるものをもう一作ほど挙げておこう。

一つめは、『後太平記四十八巻目 津国女夫池』(享保六年二月 竹本座初演)。これは、後者の登場人物の選択・設

定とその使いかたの興味深い作品である。概要をいえば、これは、永禄八年五月十九日に足利將軍義輝が、松永弾正久秀に暗殺された事件をふまえたもの。もちろん足利義輝は「源義輝」、細川藤孝は「浅川藤孝」となっているが。

そして、古今伝授をうけた歌人として知られた実在の細川幽斎をふまえた「管領浅川左京大夫藤孝」は、「忠臣」側の首魁、いわずとした、「三好長慶」「松永弾正」らが逆臣側ということになる。そして、主役級の登場人物の一人「冷泉御酒(三木)之進房平」が、逃亡して身を隠している身重の「御台所」、さらに誕生後の若君を扶助するのだが、その私的な事情、つまり、捨て子であった妻・「清滝」と「三木之進」自身が、実は兄弟であったという、重大な疑惑が浮上し、やがて父の打ち明けばなしによって、「実の」兄弟ではなかった事実と共に、「仇討ち」物語が呈示される。主筋の將軍家の仇討ちと共に、この作品の骨格をなしている。三木之進の父「冷泉文次兵衛長房」の「仇討ち」そのものに疑問を投げかける犠牲死とともに、いかにも時代浄瑠璃らしい作品、とっていいだろう。

しかし、親しく情をかわした生々しい記憶と、実は兄妹であったということの狭間で彼らが苦悩する部分などは、結局それが事実ではなかったとはいえ、ねっとりとしたあるいはどろどろとしたお定まりの三段目の愁歎を呈示している。

浄瑠璃の詞章の要所要所で和歌や謡曲が使われるのは、むしろ当たり前であるが、この作品ではかなり意識的に「和歌的」要素を特別な意味を持って使用していると見てよいのではないかと、私は考えている。幕府の権力を握る忠臣のトップとして管領「藤孝」を持ってくるのも、最期の管領が細川晴元であったわけだから、かなり意図的で無理矢理なものがある、と見ることができる。つまり、それだけあの「幽斎」のイメージが意図的に持ち込まれた、作者の選択が働いた結果の、登場人物であったと見てよい。三段目と強く関わる「御台所」について、一段目につきのような「安産祈願」をめぐる一節がある。

思ふこと。御生の注繩に。引鈴の。叶はずばよもならじとの頼を加茂の瑞垣に。玉依姫の其昔別雷の御神を。御産の紐のやすらかに。あやかるための御祈り。二月の空の暖かに。日和義輝將軍の御台所の神詣で。御伽は君のお手かけの梅が枝白菊初雪を。妬憎みも女子氣の。奇特帽子に顔包みいづれをそれと余所目には。人の見知りも嵐吹。柳が枝ともつれ合徒をひろひもお身ごなし。外珍しくともすれば行休らひて道草を。摘めどいづれをいづれ共名さへ知らじな萌出る。草の色々問ひ問はれ。摘む春草のなにくぞ。御形繁妻仏の座。鈴菜蘿蔔。芹齊。世に災難もな。草は。此初春に。つみ捨てて。野辺は千草の色見草歌人の家の言種は。千々の心を種として。万の言の葉も繁り。色好みの恋草は。忍ぶ夜すがら月見草とみにも人を夢見草。いとし人同士片敷けば。草の枕も綾や錦か。金欄緞子の夜着も布団もな。なんくなつこりやいらぬく。締めて寝た夜の。其明けの日は。いと。思ひのまさり草。誰か嫁菜の寝よげにて朝置。露の消残り。濡れた姿の妬ましや。我に摘めとて此草の人に心を。つくぐし。茅花乱れて御生野の桜はまだし梅薫る花にあこがれ草にめで宿をかすみのま。ならば。明日も明後日もまどひしてつま。欲しさに行かねてしばし。休らひ給ひける。

(新日本古典文学大系『近松浄瑠璃集 下』による、以下同じ)

「妬憎みも女子氣の」などといいつつ「梅が枝白菊初雪」と、御台所のライバルである妾たちの名までが、和歌的美しいが、「歌人の家の言種は。千々の心を種として。万の言の葉も繁り。」などは、やはり、「古今集仮名序」をふまえたものといっているだろう。「いとし人同士」「締めて寝た夜の。其明けの日は。いと。思ひのまさり草。誰か嫁菜の寝よげにて朝置。露の消残り。濡れた姿の妬ましや。」など、色恋がらみの文句で埋め尽くされている。

四段目、出家して「慶覚」となっている故「義輝」の舎弟「義昭」と御台所の産んだ若君を対面させ、還俗して將軍

家の為に働いてもらいたいと談判する、という、主筋においてきわめて重要な局面で、その交渉のなかのやりとりで、次のような部分がある。

慶覚くはつと御色変り。「足利重恩の三好さへ君を弑し。天下を奪ふ頼なき世の中。慶覚還俗して招く共加勢の付はおぼつかなし。何を以三好を討たん楚忽也藤孝。是非なや数度の軍功誉れを表し。和歌は古今の伝授を得文武二道と呼ばれし達人。思慮浅く成果つるも。足利の運命尽果てし浅まじや。仏神にも恨なし口惜しの世の盛衰や」と。怒りの御目に涙を浮かめ泣く／＼奥に入給へば。始の悦び忽に。萎れ入たる有様は目も当て。られぬ風情なり。

慶覚は、ここでいったん藤孝たちを見限って、出奔してしまう。しかし「数度の軍功誉れを表し。和歌は古今の伝授を得文武二道と呼ばれし達人。」である藤孝は、慶覚の卓見に感銘を受け、自分たちを発憤させるための出奔であると見切って、驚かない。そのまま味方の勢を集め始める。慶覚は慶覚でたまたま將軍義輝公の「古御所」で一夜を明かすはめになり、その際、死者たちの霊、とくに暗殺事件の際殺された義輝と四人の女たちの霊によって、還俗してふたび「立つ」決意を固め、大団円に向かっていく。

時代浄瑠璃のおおくがそうだといえばそれまでなのだが、善悪のせめぎ合い、義理ばったやりとり、もののふらしく決然と勇ましい展開の中に、おどろおどろしく、ねっとりした情の世界が潜んでいる。この『女夫池』でもまた、その情の「水脈」をひそかに繋ぎ、「慶覚」のいったん逃亡してしまう、といった、一件裏切りとも見える行動と、ことばの中に、本質を読み取る賢明さを、「藤孝」において可能にしたのが、「古今の伝授」を得た和歌的教養であったと、読ませようとしているかのごとくである。時代浄瑠璃特有の、見所満載で、ストーリー展開の緊密さと必然性を見れば、

若干緩い、そういったなかで、その潜在する「情」の水脈をにない、やはり、前後の呼応において、ゆるい求心力を与えているこれは、案外本質的な重要性を持つのではないかと思わせる。「藤孝」と「古今集仮名序」が、意図的に設定された趣向の一環であることは、もちろんであるが。

(三)『信州川中島合戦』

「軍記」的世界の「情」の水脈を、「女夫池」では「古今集仮名序」を要とした、和歌的なものになっていたとすれば、同様に、「仮名序」利用が見られる、『信州川中島合戦』（享保六年八月 竹本座初演）についてはどうだろうか。「武張った」世界であることも同様だが、とくに『川中島合戦』では、当時流通して読まれていた『甲陽軍艦』の品第十一、二十六などの記述を元に、中国の歴史小説『三国志通俗演義』の趣向を取り込んでいることが指摘されている。この点について、鳥井フミ子氏によって紹介すれば、この作品における、

武田信玄は、諸葛孔明の臥龍の軍法を学んで信州の木曾山中に世を遁れていた山本勘介を、劉備の三顧の礼に習って雪中に訪ね、主従の約束をする。これを聞いた長尾輝虎(謙信)は、直江山城に頼み、直江の女房唐衣が勘介の妹であることを利用して勘介の老母と妻お勝を越後に招き寄せ、お勝の似せ手紙を使って母危篤と勘介に書き送る。勘介は越後にかけて事情を知り、女房お勝を叱責する。お勝と唐衣は互いに己の立場を主張して斬り合いとなる。気丈な母は、勘介を自由な身にするために自ら進んでお勝と唐衣の刃に貫かれて死ぬ。輝虎は謀計を悔い、勘介は発心して出家する。

この経緯は、『三国志演義』で、曹操が劉備に仕える軍師徐庶を、欺いて招き寄せる件りと酷似している。最初

に軍師を抱える武将(謙信・劉備)はどちらも謙虚で、軍師(勘介・徐庶)は彼に心服する。敵に軍師をとられたことに焦立って策略をする武将(輝虎・曹操)はどちらも驕慢である。手紙を使って母を誘い出し、母を囚にして軍師をおびき寄せようと建策する人物(直江山城・程豆)のいることも両作とも同じである。母が気骨のある女丈夫で、息子の行動の自由を束縛しないために自害することも共通している。このように、近松は人物配置や事件の経緯ばかりでなく、人物の性格に至るまで『三国志演義』を応用しているのである。(注5)

しかし、このような、『三国志演義』のようなものから登場人物の勢格付けまでそのままってきたような、男性的で、武張った、義理の勝った作品において、やはり、「古今集仮名序」の利用がある、というのは興味深い。そして、それはやはり、この作品の「主筋」のようなものに関連して出てくるのだ。

その「主筋」のようなものとは、武田信玄の息子「勝頼」と謙信の娘「衛門姫」との恋物語である。まず、「仮名序」を引いている部分から。

ともに参詣した諏訪社から、手に手をとって出奔したため「衛門姫」も「勝頼」も双方の親から勘当されているのだが、「衛門姫」と「勝頼」のふたりは、たまたま沈淪の生活の中で、偶然父信玄と出会い、牛に草を食べさせる振りをして、「衛門姫」はひとりさりげなく近づいて、「勝頼」の勘当を解いてもらおうよう、取りなそうとするが、信玄は聞き入れない、ただ、「衛門姫」は見捨てがたいので、父謙信にみずから見に代えても取りなしてやろう、ここにいなさいと、頼もしくいう。この分なら夫「勝頼」の勘当のゆるしも近いと、「よろしくお願いします」とばかりいっておとなしくしていたところ、たまたま来合わせたにっき村上義清と「勝頼」の闘いが、始まってしまふ。

「義清」には不運が重なり、「勝頼」には幸運が重なって、果敢に闘った「勝頼」は「義清」を見事討ち取った。引

用する。

続いて勝頼かつばと飛込。流にしたがひ水につれ。跡を求めてへ追かくる。義清も命からぐ。難なく向ふに泳ぎ付又逃出るを。逃しも立ず取て引敷き首ふつと搔落し。「村上左衛門の尉義清を。武田勝頼打取たり」と呼はり給へば。父信玄思はずすつくと立上り。「でかしたくそれこそ我子不興許す」との給へば。各はつと土に平伏し有がた涙悦び涙。目に見ぬ鬼神の仇崇りも心に吞込天目山。甲斐の白根の動きなく猛く勇める武士の。心も和らぎ紅葉葉の錦に。包む親子の中。男女の語らひも。皆此道より情知る。千首の歌の御威徳。かの貫之が言の葉を仰ぎて。今も感じける

ただ、この『川中島合戦』の先の二作と相違する点は、情念的なもの、ねっとりした、等と形容したそれを、ほとんど感じさせない点である。

この恋には、はじめから「村上義清」がじゃまに入っていた。いわば戦において、信玄・謙信の敵であるばかりではなかったのである。「義清」は「衛門姫」が「勝頼」と密通したと、まず騒ぎ立てた人物として、一段目から登場する。

村上左衛門義清神前迄道具立させ。莞爾共せず「ヤァ直江高坂。ぬし達は一国の家老。弓矢の法存ぜずとは言はせぬ。たとへ道中筋にても他の分国を通るには。先へ使者をもつて案内する法。況当社は我分内一応の届けもなく踏込慮外至極。をよそ絵馬は神馬を表する物なるにあれ見よ。信玄乗馬の毛色甲斐の黒駒。馬取も止めかぬる駆馬の勢。必定村上が領分へ馬を入。信濃一国押領の威勢を頭はす為な。殊に衛門の姫は親景虎に某所望しかけ女房同

然。しかれば直江兄弟は家来分。主従の礼義知らぬか」と。言ふより堪へぬ若者「何くと。直江兄弟を家来とは兄山城守実綱。此大和之介時綱が事か。我々は越後の国守長尾景虎公ならで。天が下に主君なし。御辺に一粒の扶持は得ず。家来とは推参千万ま一度言へ。延び過た舌の根切下げん」と。躍り出るを高坂弾正「暫しく。大事の姫君御供我らも若旦那の供。理の非のと言ふ所でなしひらにく」と押鎮め。「案内なく御領内へ立越しとの御憤り御尤去ながら。使者を以御案内申さば。道筋掃除等伝馬以下御馳走仰付らるゝ。御心遣を遠慮に存差控へ。不念と成は心の外まつびら御宥恕下さるべし」と。手をつかね懇勲の勝に乗。「ヤァ抜句言ふまい勝頼と衛門の姫蜜通し。某が領内を忍び合の宿にせられ。鼻毛をよまるゝ村上ならず不義者の男女。落居する迄此義清が預かり置動かせぬ。両人共に置いて帰れ。身が者共神主が屋敷を取巻き。大事の預り者油断なく警固く。絵馬踏割れ叩き破れ」とひしめく所に。お供の局下女妣「なふ情なや姫君様勝頼様。いつの間にかは行方知れず床にお文を残されし」と。指出す一通弾正追取懐中すれば直江も仰天。……

彼らが残した「一通」の書状には「かねく商人の便りに文を通はし契約の中、義清に糺され恥を見んも口惜しく。暫く影を隠す」とあった、かれらはもともと「できていた」のである。興味深いのは、ここで一曲を一貫して「あざなう縄のように」縦断する、恋物語が、非常にカラリと、じめじめせずに書かれている、という点であろうか。ここでは、「女房にほしいと言って遣ったから、女房も同然だ」といい、いやしくも国主の姫君・若君について、「不義者」呼ばわりをして、はばからない「義清」には、高坂・直江ら家来たちも閉口する。そのように言い立てられる「恋」が、ロマンチックに見えないのもちろんである。

あるいは、使者を謙信に送り、縁づきがおそい娘は必ず不義をしでかして、噂が立ち、嫁のもらい手がなくなって、

一家一門の名をくだす者ですから、私に嫁によこしなさい、と指図がましい書面で謙信を怒らせ、使者が手荒く追い返される、といった場面も、また、同様。

作品全体を縦断する、大切なはずの「恋物語」の、とりつく島もない描かれ方はこの作品に、一貫していると言つてよい。たとえば、つぎにあげる、山本勘介と、逃亡中の二人が邂逅する部分なども。

武田四郎勝頼。衛門の姫との浮恋路義清に言ひさがされ。諏訪明神より立退き。爰に迷ひ彼所に隠れ。足も破れて血に染まる茨萱の根小笹原。野路吹く風も追手かど心は先に目は跡に。見帰りく衛門の姫勘介にはたと行当り。「ア、御免成ませ」とびつくり驚く計也。勘介じろく尻目につけ。「若い女子若い男水入らずの二人連れ。ム、ハ、くくく聞えた。親の極る縁は嫌。貴様ならでと領き合婿の大事の詔へ饅頭。ほつかり割るは思案の外野でも山でも此道く。こつちもちやつと柴刈つて饅頭は食はず共。鼻が豆茶を賞翫いたそ」と打過る。

このあと、勘介は、彼らの身分を知って驚き、危難を救ったあと、一刻も早く村上の領地から出ることをすすめて、去る。

たまたま居合わせた辻堂で、彼らがそこから駆け落ちをした、諏訪神社への参拝に、ともをした高坂時綱・大江大和之介が来合わせて、しばらく話すのを、聞いてしまう場面。かれらはとにかく衛門姫・勝頼をそれぞれ引き離して連れ帰らねば、腹を切っても済まない、となげく。甲斐と越後が戦になる、という噂を聞いた。両家に不義密通の噂を言いかけた村上義清が本の起りではあるが。……そうこうするうちに、彼らは「兵火」の赤く明るく燃え上がるのを見る。鬨の声も耳をつんざく。両国の戦と見た高坂・大江のふたりは、いったんは闘おうとするが、斬るべきは村上義清だ、

と思ひ直し、仁王のような形相で二人そろって駆けさった。

跡には夫婦。しよんぼりと。身を悔みたる託ち泣や、有て勝頼。「病は少シ癒るより起り。孝は少艾より起るとは。ひつしと胸に思ひ知る。我愛惜に親々を修羅に道引不孝の大逆。あれ見よ子故に怒る瞋恚心の兵火。勝頼程の者が色に迷ひ民百姓の苦しみを。余所に見んも本意ならず。爰に父の目はなく共月日は父の両眼。父と父とは合戦し子と子は妹背の語らひは。天の照覧恐ろしく。義を見てせざるは勇なしこれより夫婦引別れ。今迄積みし梟悪の非を改むれば。孝も立義も立。互に心残れ共御身も輝虎の娘。輪廻の詞無用ぞ」と。すげなく言へど目は涙。泣崩おれて衛門の姫。「せつなき恋を義に代へて添はれぬとの御詞。理也去ながら。親と親との戦ひやら村上との軍やら。誰が知らして誰が知る。父の軍に極らば。成程添ふまひ思ひ切ふ。もし義清退治の上。互のお心打解け和談有まい物でもなし。添ふか添はぬか縁を切か切らぬか。境は夜明て知るゝ事。それ迄は変らぬ女夫。何ぼ不孝に成連も。半時や一時のめかりはない。何がなしにつこりと互に飽く程締合ふて覚悟させて」と抱き付。「エゝ時も時折も折未練至極」と突放せば又取付。あなたへ退けばこなたへ慕ひ。纏るゝ袖に引かるゝ心。未練くも恋慕の闇未来を照らす辻堂も妹背の台と成にけり。

これは、ラブシーンだし、「義理」によって恋を思い切ろうという劇的な葛藤も、見たところはあることになるか？ いや、これはとてもそんな代物ではない。なんと言えはいいのだろうか。別の聞き方をすれば、『信州川中島合戦』の「恋」について、だれもなにもいわないのはなぜだろう、といったところか。『心中二枚絵草紙』ばかりでなく世話物一般に上で述べたような「ねっとりした湿度の高い情念」はある。『女殺油地獄』にさえある。『信州川中島合戦』に

おける、その見事な欠如は、何を意味するのだろうか。

「古今集仮名序」などの和歌的要素は、「恋」に親和性が高く、『三国志演義』のような、乾いた物語に湿り気を与えるために、使われる。しかしこの『川中島合戦』の「仮名序」は、乾燥が激しすぎ、浮き上がりそうになったそれを、リベットで打ち付けるような、使い方がされているのではないだろうか。たけきもののふの心をやわらげる、それならば、明快で理のかった、当時人気の『三国志演義』を日本化して浄瑠璃作品に取り込んだ、この試みは、大変に「無理」も含んだおもしろい、試みだったといえるのかもしれない。

〈注〉

- 1 「世話物浄瑠璃が最初から一段浄瑠璃として誕生し、その規制の中で劇的展開をはかって、新しい戯曲的秩序を作り上げた」と『近松世話浄瑠璃の研究』（諏訪春雄氏 一九七四年刊 笠間書院）「第十章 世話浄瑠璃の段」に。
- 2 向井芳樹氏『近松の方法』（一九七六年刊 桜楓社）「1 近松時代浄瑠璃の方法／身替りの論理」
- 3 「尋ぬる袖に降る涙、夜半の時雨となりにけり、これこそ曾根崎、天神の、松と棕欄との連理の森、かき集めたる言の葉の、余所に聞きしも、今はまた余所にあらしの身にぞしむ、おしまも同じ我が庵は、おはつ徳兵衛の、その暁の、夢も破れて、まだ間もないに、心中宿世の報の業か、そのみならず親方や、親の苦勞と思ひは知れど、男死なせて見てゐられうか、女房さきだて、存らへあらば、そりや、犬、猫も同じこと……」と「致死期の道行」に見える。「親方や、親の苦勞」に言及しても、あまり罪の意識に苦しむ風はなく、互いを先立てて自分が生き残ることのほうが、耐えられぬほどの罪悪感をもたらす風である。いうまでもなくこの部分にみられる「わが庵は」は天満屋のことではあろうけれども、そのことさらしいことばの選択からは、古今和歌集仮名序にあり、巻十八所収でもある「わが庵は宮この辰巳しかぞ住む世をうぢ山と人はいふなり」を、すくなくとも印象として「かする」程度には、意識していると言っているだろうか。この辺りどの歌を採ったと特定はできなくても、ことさらに歌らしい行文

近松浄瑠璃の「古今集仮名序」

が心がけられている、と見ることが出来る。

4 『増補 近松序説』(一九五七年刊 未来社)

5 鳥居フミ子氏「中国的素材の日本演劇化―『三国志演義』と浄瑠璃―」(東京女子大学比較文化研究所紀要 第五十九号
一九九八年一月)